

W. Edson Richmond,  
*Ballad Scholarship: An Annotated Bibliography*

桜井雅人

パラッド研究においても何が基本的で重要な文献であるかという点になると答えはそれほど簡単ではないように思える。特定の研究テーマについて如何なる文献が存在して、それぞれどのような内容を含み、どのような価値があるのかということになると、情報さえも十分ではない。ことにパラッドは様々な学問分野（文芸学・文献学・民俗学・音楽学・歴史学など）で研究が行われているので、一口にパラッドといってもそれぞれの分野での重要文献というものはおのずから異なってくるであろう。一般的な参考図書や概論書・基本文献については多くの解説的論文やテキスト類などからも知りうるのだが、いざ論文をしたためようとするといろいろな分野の書誌（たとえば、*The New Cambridge Bibliography of English Literature*）および比較的新しい研究書や研究論文あるいは図書目録・書評・新刊書カタログなどを頼りにしてめぼしい文献を探し出してくるのがせいぜいのことで、それとても完全ではありえないし、これまでまとまった研究のない特殊なテーマを抜おうとすると海図なしで船出をするようなものであった。このような状況の下で、パラッド研究という題目での詳しい注解付き書誌の刊行は、遅きに失すると言えないこともないが、大いに歓迎されることである。

本書は *Garland Folklore Bibliographies*（編集主幹は Alan Dundes）の1冊として出された民俗学の書誌であるが、他の学問分野の文献でもパラッドに関係したものならば含んでいる。一方では民俗学固有の問題点が浮き彫りにされないという欠点もあるかもしれないが、民俗学自体が様々な学問の入り会い地のような位置にあるので、このほうが実用上は役に立つ。しかし、パラッドといっても、いわゆる伝承パラッドを指しており、ブロードサイド・バラッドやリテラリー・バラッドは直接の対象とはしていないようだ。ただし、これらの扱いを見ると境界線はそれほど明確ではない。たとえば Claude M. Simpson, *The British Broadside Ballad and Its Music* や A. H. Ehrenpreis, ed., *The Literary Ballad* は載っているが、G. Malcolm Laws, Jr., *The British Literary Ballad* (1972) とか、V. de Sola Pinto and A. E. Rodway, eds., *The Common Muse* (1957); L. Shepard, *The History of Street Literature* (1973) あるいは Roy Palmer の多くの著作などは含まれていない。ブロードサイド・バラッドそのものは伝統的に民俗学の対象とはされてこなかったのは確かだが、民俗学が都市文化や文字文化をも対象としつつある現状や、民謡となっている現在のバラッドのレパートリーはむしろブロードサイド系のもののほうが多いこと（たとえば E. MacColl and P. Seeger, *Travellers' Songs from England and Scotland*, 1977 収録の歌を見よ）を考えると、この方針にどの程度の妥当性があるのか検討の余地は残っている。「非チャイルド系バラッド」という概念を考慮するならば、徹底してチャイルド・バラッドを排除している P. Kennedy, ed., *Folksongs of Britain*

and Ireland(1975)なども役立つ資料であろうし、最近では Dianne Dugaw, *Warrior Women and Popular Balladry, 1650-1850* (Cambridge UP, 1989) のような興味深い研究も出ている。選択された文献からみると、どうもバラッド研究における起源重視の伝統がかなり反映されているようだ(つまり、現在の民俗学の方法論を正しく反映していない)。しかしその一方で、イギリス(およびアメリカ)のバラッドを中心にしているが、ヨーロッパ・バラッドの研究にかなりのスペースを充てていることは特筆すべきである。当初からスカンジナビアとの関連が取り沙汰されてきたにもかかわらず、必ずしも研究が十分に行われてきたとは言えないだけに、この1点だけをとっても本書の存在価値がある。このことは、編者の関心をよく示すものである。ただし、スカンジナビアとドイツ以外については多くが英語論文であり、必然的に偏りがあり、それぞれの地域における研究動向を正確に反映したものではないことが予想される(それらの地域にはそもそもバラッドというジャンルが存在するかという問題も絡んでくるのではあるが)。なお、英語で書かれた英米のバラッドに関する文献であってもアメリカとヨーロッパ以外で公刊されたものは残念ながら収録されていないようだ。

編集方針としてまず注目しておかなくてはならないことには、書名に示されているようにバラッド書誌ではなくてバラッド研究書誌であることが挙げられる。つまり、研究資料・研究業績という形で発表されたものを収録しているのであって、一般向けのバラッド集(たとえば *The Oxford Book of Ballads*, 1910, 1969)などはほとんど含まれていない(ただし M. Leach, ed., *The Ballad Book* はあるが)。このことは、入門的な研究者や非専門家には入手しやすいテキストが示されていないという不便を感じさせるが、逆に選択・配列・序文・注釈などには研究に役立つ部分もある。少なくとも David Buchan, ed., *A Scottish Ballad Book* (1973) とか A. B. Friedman, ed., *The Viking Book of Folk Ballads* (1956) などはある種の「研究」であって時代的変遷とかテーマなどを検討する際の研究資料としても役に立つものと思われる。また、非英語圏のバラッドは(少なくとも我々には)知りうる機会が少ないだけに、学術的なもののみならず一般向けの翻訳バラッド集(たとえば George Borrow, *Ballads of All Nations*, 1927; W. S. Merwin, *Some Spanish Ballads*, 1961 あるいは Reclam 版 *Europäische Balladen*, 1967 など)も収録してほしい。もう少し言うならば、たとえ三文バラッド集(既存のバラッド集から適当に集めてきて編集したもの)であってもバラッドの受容とか一般読者への普及についておそらくは Child の5巻本以上に大きな影響を与えていることを考えると、これらが「バラッド研究書誌」になじまないとするならどこかで書誌を作ってほしいものである(たとえば伝承童謡における Iona and Peter Opie, *Three Centuries of Nursery Rhymes and Poetry for Children*, 1973, 1976 のようなものを)。一例をあげると、挿絵入りのバラッド集がこれまでたくさん出ているが、ほとんどが一般読者を対象とした詩集であって、バラッド研究者にはその存在さえもまったく無視されてきた。かなりの読者がこれらの挿絵入りバラッド集によって初めてバラッドにふれたであろうし、挿絵はバラッドの解釈と直接的に関係するはずなのに、研究しようにも資料の存在さえ分からないのである。本書誌の索引で *Illustration* を研究したものを探すとデンマークの本が1冊あるのみで、英米のバラッドの挿絵はまったく研究の対象にもなっていないようだ(もちろんこの書誌にないから研究されていないとは言い切れないが)。

このことともいづから関係があるが（というのは、すでに1898年以前に多くの挿絵入りバラッド集が出版されているので）、本書はもう1つの方針として、若干の例外（Percy, Scott など）はあるものの、1898年（Childのバラッド集成が完成した年）以降の業績に限定している。これはD. K. Wilgusが英米民謡研究史（*Anglo-American Folksong Scholarship since 1898*, 1959）の出発点とした年度でもあり原則的には妥当なところであると思われるし、本書はアメリカ民俗学会創立100年記念刊行図書でもあるところから、バラッド研究100年の集大成を意図したものであろう。ただし、1898年以前の文献はChildに記載されているので繰り返すのは実際的ではない（p. xxi）と述べているが、Childには写本や民謡集が主たる参考文献となっているのであって研究や批評は手薄であるし、Child以前の研究や集成であっても復刻版や編集版・校訂版の存在（これらには時として有益な序文が新たに付けられている）は知りたいし（M 51のScottについてはHendersonの校訂版などを記載すべきである）、Childの書誌に注解はなかったので、ここで重複して取り上げても無駄にはならない。むしろ1898年とは編集上の目安と考えておいたほうがよかろう。J. W. Hales and F. J. Furnivall, eds., *Bishop Percy's Folio Manuscript* (1867-8) や G. C. D. Odell, *Simile and Metaphor in the English and Scottish Ballads* (1892) などは研究上の便宜を優先して「若干の例外」として加えておきたかった。

本書の構成をみると、前書き・序論に続いて本文が13（A～M）に分かれており、巻末には著者索引と題目索引が付けられている。序論は研究上の問題点の指摘と本書誌の構成について述べたものである。本文の分けかたは、A. 基礎的記述（バラッド全般に関する基本図書と論文）（55）、B. 論文集（26）、C. 民俗音楽雑誌（28）、D. 書誌類（および参考図書類）（69）、E. バラッド理論（440）、F. バラッドと文芸（121）、G. バラッドと歴史（47）、H. バラッドの言語（49）、I. バラッドの韻律（43）、J. 個々のタイプとサイクル（428）、K. バラッドの音楽（54）、L. 収集者・編集者・研究史（190）、M. バラッド集（56）となっている（カッコ内は収録項目数）。一見すると網羅しているようであるが、Cの雑誌が民俗音楽関係のみというのは理解できない。本書が民俗学書誌シリーズの1冊であるのなら、論文が一番多く掲載されているはずの民俗学関係の雑誌はどうしても落とせない。しかも、*Journal of American Folklore* のように詳しい索引（*The Centennial Index*, 1988）が作成されているものにはその有無も記載しておいてほしい。また、バラッド研究の民俗学における位置付けがきわめて不徹底であることを考えると、基礎的記述とかバラッド理論という前に民俗学全般の理論や方法との関連を示すためにも“Folklore”（あるいは“Oral Literature”）とか“Folk Song”という項目を設定してもよいだろう。バラッド研究の枠組みはバラッドのみの研究からでは不可能であるから、たとえバラッドについての言及が少なくとも枠組みとなりうる文献（バラッドをも十分に射程内に入れた民俗学などの理論・方法論を扱ったもの）をまとめて呈示してくれると便利である（たとえば近年注目を集めつつある口承詩研究でいうと、R. Finnegan, *Oral Poetry*, 1977 とか P. Zumthor, *Introduction à la poésie orale*, 1983）。

すべての文献をきちんと分類することはおそらく不可能であろう。たいていの場合は幾つかの問題を扱っているのだから、それに対処するには徹底的に相互参照を付けたり、同一の文献を該当箇所に必要なだけ幾度も掲載すればある程度は可能となるのだが、本書はそのような方法は

探らずにどこか1箇所載せるだけで相互参照も原則として付けていない(ただし、例外的だが Sargent and Kittredge のように A 43 と M 50 の両方に出ているものもあるし、相互参照も少しはある)。必要ならばそれぞれの箇所を参照したり索引を探せばなんとかなるのでこれ自体はさほど不便ではない。ただし、分類の基準については疑問が残る。たとえば、B. H. Bronson, *The Traditional Tunes of the Child Ballads* は M (バラッド集) に、その簡約版 (*The Singing Tradition of Child's Popular Ballads*) は K (バラッドの音楽) と分かれているし、L. Vargyas の原書は L 182 で訳書は M 55 である(この2巻本を1箇所に押し込めるのは難しく、強いて言うのなら第1巻はAで、第2巻はMであろう)。R. D. Abrahams and G. Foss, *Anglo-American Folksong Style* や L. M. Watt, *The Scottish Ballads and Ballad Writing* や L. C. Wimberly *Folklore in the English and Scottish Popular Ballads* などは理論的というよりは記述的であるので E (バラッドの理論) に入っているのは奇妙に見えるが、「理論」とはなっていないこの項は J の個々のバラッドの研究に対してバラッド一般について特定の問題を扱ったものをまとめただけのようなものである。それゆえ E は項目数が多くなってしまったのであり、むしろ「特定研究」のような表題に変えればよかった。なお、L 7 (Ames) はむしろ A に含まれるべきである。

一般的にはかなり詳しい書誌だといえる。図書・雑誌論文(主に学術的)のほかには未刊行論文も少し含まれているようだ(ただし、どの程度まで包括的なか不明であるし、はっきりと“unpublished”と書いていないので一般図書と表記上紛らわしい)。同じ出版社からほぼ同じ頃に編集された注解付き書誌である James Porter, *The Traditional Music of Britain and Ireland: A Research and Information Guide* (Garland, 1989) および Terry Miller, *Folk Music in America: A Reference Guide* (Garland, 1986) と比べてみると、視点が違うので同列には論じられないが、バラッドに関しては歌詞のみの文芸的研究が多いこともあって数の上ではずっと収録項目が多いと言うことはできる。もちろんお互いに相補的な役割にあるので、とくに音楽面や民謡一般と共通する問題などに関する文献探索に際してはこれら2冊も大いに利用価値があるし、その一方では歌詞のみのバラッド集・民謡集やブロードサイド・バラッド集はこれらにもあまり収められていない。ただし詳しいといっても既存の書誌の集大成ではない。もしかすると意図的な脱落かもしれないが、E. K. Chambers, *English Literature at the Close of the Middle Ages* (1945) は入っていない。また、個々のテーマで調べてみるとまだまだ不十分であるようだ。たとえば“Judas” (Child 23) について索引を見ると、J 17 (Baum) しか載っていないのは物足りない。D. G. Schueler, “The Middle English Judas: An Interpretation” (*PMLA* 91, 1976) とか M.-A. Stouck, “A Reading of the Middle English Judas” (*JEGP* 80. 2, 1981) もほしい。Robin Hood ballad を扱った歴史学関係の文献でいえば J 95 (Dobson and Taylor) のほかにも M. Keen, *The Outlaws of Medieval Legend* (1961, 1977); R. H. Hilton, ed., *Peasants, Knights and Heretics* (1976); J. C. Holt, *Robin Hood* (1982); J. Bellamy, *Robin Hood: An Historical Enquiry* (1985); J. R. Maddicott, “The Birth and Setting of the Ballads of Robin Hood” (*The English Historical Review*, xciii, 1978) などは有益であろう。このように、とくに民俗学以外の学問分野におけるバラッド研究文献はやや手薄という印象を受ける。もっと特殊な分野となるとあ

まり役に立たないところもある。たとえば、キャロルとバラッドの関係ともなると、キャロル研究の側からはしばしば言及されているにもかかわらず (R. L. Greene は *The Early English Carols*, 1977 の序文の中で約 16 ページにわたってこれらの関連を検討しているし、E. Routley, *The English Carol*, 1959 では “The Ballad Carol” という 1 章が独立して与えられている)、“carols” は巻末の索引にもないし、これらの書物も記載されていない。このあたりは本書の守備範囲を越えているらしい。

個々の記載事項をみると訂正や修正すべき箇所があちこちで見つかる。L 132 (McWatt) は著者名の誤記で、索引とともに削除すべきである (E 411 に正しく Watt として収録してあるのがこの書物である)。B 22 (Pettitt) も共編者名が抜けていたために別の書物として重複して入り込んだもので B 2 に正しく記載されている。K 18 (Bronson) は K 22 と同じ論文であるが、K 18 の題名の途中の定冠詞が抜けたため別論文とされたのであろう。書物では、アメリカ版が重視されているのは理解できるとしても、イギリス版がある場合にはもう少し親切であってほしい。両方示してあるものも多いが、A 37, A 47 (第 4 版), A 48, F 11 などはアメリカ版のみであるし、I 37 ではタイトルも違っているので探しにくくならう (ちなみにイギリス版は *Where Is Saint George?*)。全面改訂版があるもの (L 179 には M. Karpeles, *Cecil Sharp: His Life and Work*, 1967) や第 2 版のあるもの (A 26)、改訂版では違うタイトルになったもの (K 39 は *Folk Music in the United States: An Introduction* に変わった) もある。1 巻本 (M 52) や簡約 1 巻本 (M 48) のあることも示すべきである。論文は他書に再録されている場合には出来る限り記しておいてほしい。J 96 は *Folklore and Fakelore* (1976) に、K 48 は議会図書館発行の同じタイトルのレコード解説 (注解ではこのレコードの存在にもふれていない) および *Studies in Musicology, 1935-1975* (1977) にも再録されている。ただし、A 30 (Ker) が再録されているのは *Form and Style in Poetry* であって *Collected Essays* ではない (後者には “On the Danish Ballads” などが含まれているが本書誌にはなぜか未収)。L 91 (James) の再録は Leach and Coffin のみであり、Dover 版 Child バラッド集成の巻末にも収録してあるが、その論文は L 79 (Hart) の誤りである。復刻版は *Books in Print* などである程度は調べることができるといっても絶版も多いので、もう少し詳しく示してほしい (A 8 (Folcroft 版), A 19, A 21, A 22, A 36, A 41, E 164, L 89, L 114, L 169, M 16 (Cooper Square 版), M 17 (Dover 版), M 44 (Dover 版) など)。逆に復刻版のみで初版の記録がないものもある (A 49 は、これが復刻版であることさえ記していないという不親切な本であるが初版は 1914 年)。A 52, M 55 では英訳者名 (それぞれ Arthur H. Whitney, Imre Gombos) を標題紙ではなくその裏に印刷してあるためか、落ちている。誤植 (誤記) では A 26 (Hutchinson's → Hutchinson), A 52 (Akademiai Kiadó → Akadémiai Kiadó), B 19 (Rowman → Rowan), E 10 (Traditions ballade → Traditionsballade), E 427 (Dover Press → Dover Publications), L 182 (Zeneműkiadó → Zeneműkiadó), L 188 (1958→1959); Author Index (Lüthi, D 253 → E 253) など。最終的な照合がやや雑である。

注解がない項目もあるがたいいては 2~3 行から多くて 10 行くらいの説明が付いている。文献解題とまではいかないが、単に目次を再録した程度のものであっても文献探索の目安になるし、ことに英語以外の文献についてはほかに知る手だてが少ないので、便利である。ひとつひ

とつ詳しく見ていくと書き方に不満が出てくるところもあるが、付いているだけでも有り難い。ただし、注解の内容は必ずしも書物全体の2割ほどを占めている詳しい索引と関連してはいない。たとえば、J 45 (Brewster) には「典型的な歴史的地理的研究」とのコメントがあるが、索引に“historic-geographic”はない（それゆえ他の歴史的地理的研究文献の存在もわからない）。これはむしろ索引作成上の問題点である。索引といえば、民俗学の研究方法論に関する用語が少ないことと“legacy motif”とか“incremental repetition”や“leaping and lingering”のようなバラッド分析上のキーワードがないのもやや不満である。先にふれた *The Centennial Index* のように各文献ごとにいくつかのキーワードを指定してそれを索引化するという方法も考えられたであろう。なお、索引で“Brown, Anna”と“Brown, Mrs.”とが別項目になってそれぞれ別文献を指し示しているが、同一人物であるからまとめてほしい。

以上のごとく様々な限界や欠点を持ってはいるが、全般的に見れば利用価値は非常に高いだろう。何といても初めての単行本の書誌であり、しかももっとも詳しく新しい。これだけの量の文献名が一堂に会すること自体に大きな意味がある。文献を収集するだけでなくそれぞれに注解を付けることはかなりの困難を伴う作業であったに違いない。民俗学がここ30年くらいに大きく様変わりをしてきているにもかかわらず、英米では Wilgus (1959) 以降本格的な民謡研究史（日本ではあまり注目されていないが、かなりの部分がバラッド研究史である）が出ていないこともあって、本書がその大きな間隙を埋める役目も果たすのは間違いない。編集主幹も言うように「これから何年にも互って熱心なバラッド研究者の必携書」となることを期待したい。

W. Edson Richmond, *Ballad Scholarship: An Annotated Bibliography*.  
New York and London: Garland Publishing, Inc., 1989. xxvii + 356 pp.